

E—23 家政学の体系の確立と意味の測定

共立女大家政

松島千代野

1. 本研究は家政概念を数量的にとらえ、家政学理論を客観的に検証することを目的とした。家政に関連した日米共通概念群を刺激とし、その感情的意味体系と内容を比較心理言語学が起用している意味微分法（SD法）によって測定した。

家政の意味体系の普遍性はSD 法尺度の因子的次元を日米個々に究明して家政の意味空間構造として求めた。

この日米共通の因子構造によって家政の意味内容の相違性、すなわち個々の概念の異質構造を両集団別に明らかにした。

この概念間の異質構造によって日米両集団の家政概念に対する相互関係を比較検討した。

2. 選択概念16個（裁縫，調理，家政学，化学の例）に対して15個のSD 尺度上の得点を約800人の日米被験者から集収した（大学家政学部1年生ならびに中高家庭科教師）。

3. 日本では「家政学」という概念は現行詞の被服，栄養や家庭管理と連想されるのに対し，米国では裁縫や調理の因襲的観念や家庭科という詞を連想される方にやや傾いている。日米ともに「家政学」は芸術よりも社会学や化学と連想される。米国の学生と教師は日本のそれよりも家政に対する観念が類似している。日本と米国の教師は両国の学生よりも類似した観念をもっている。日本の教師と米国の学生の間で概念“間隔”がもっとも遠いことが実証された。